



Data	2025-118
監督	ファブリス・ドウ・ヴェルツ
脚本	ファブリス・ドウ・ヴェルツ、 ドメニコ・ラ・ポルタ
出演	アントニー・バジョン／アル バ・ガイア・クラゲード・ベ ルージ／アレクシス・マネン ティ／セルジ・ロペス／ロー ラン・リュカ／ベアトリス・ ダル／ルブナ・アザール／ジ ヤッキー・ペロワイエ／メラ ニー・ドゥーテ／フェリック ス・マリトー

みどころ

「マルドロール」って一体ナニ？「ベルギーの闇3部作」で有名なファブリス・ドウ・ヴェルツ監督って一体何者？

犯罪とは？刑罰とは？捜査とは？「十戒」の時代ならいざ知らず、西欧型の近代刑法と刑事訴訟法が定着した今では、罪刑法定主義の原則の下、それらの概念は確立しているはず！私はそう思っていたが、韓国での歴代大統領の逮捕劇や2024年12/3の「戒厳令」の宣言を見ていると？さらに、ベルギーで1995年に起きたマルク・デュトルー事件（ベルギーとフランスの社会を震撼させた連続少女拉致・監禁・強姦・殺人事件）の捜査を展開する憲兵隊と、自治体警察と司法警察が敵対している情けない姿を見ていると・・・？

「実録犯罪モノ」といえば、日本では「阿部定事件」が有名だが、「実録犯罪モノ」の名作『殺人の追憶』（03年）や『ゾディアック』（07年）と対比しながら、マルク・デュトルー事件解決のためにベルギーの憲兵隊が仕掛けた「マルドロール」作戦の全貌（？）をしっかりと鑑賞したい。

その上で、“祖国の恥”を暴露してまであえて本作を演出した、ベルギー生まれのファブリス・ドウ・ヴェルツ監督の問題提起をしっかりと受け止め、学習したい。

■□■本作は一体ナニ？監督は？テーマは“ベルギーの闇”！■□■

「マルドロール／腐敗」というタイトルをみても、本作は何の映画かサッパリわからない。また、ファブリス・ドウ・ヴェルツ監督ももちろん知らない人だ。しかし、チラシには、

「1990年代ベルギーを震撼させた少女拉致監禁・殺人事件 巨大な陰謀渦巻く衝撃の実話

を基にした深淵クライム・スリラー」

「事件の先にあったのは、あまりに巨大な淀みの沼地」

「悪と正義を追い求め、暴走が始まる」

との見出しが躍り、さらに「ファブリス・ドゥ・ヴェルツ監督が描く新たなベルギーの闇」の見出しもあるので、何となく・・・。

その上で、本文を読むと、そこには次のとおり書かれていたから、なるほど、なるほど。

本作は、『変態村』(04)『地獄愛』(14)『依存魔』(19)の<ベルギーの闇3部作>で知られるファブリス・ドゥ・ヴェルツ監督作。舞台となるのは1995年のベルギー。当時の警察制度は、憲兵隊と司法警察、そして自治体警察からなる3つの機関に分かれていた。少女失踪事件の犯人を追うことになった主人公の憲兵隊ボールが、腐敗した警察組織の間に直面し、真実を求めるあまり孤立し、心身に異常をきたしていく様を緊迫感溢れるトーンで描いている。

■犯罪とは？罪と罰とは？犯罪捜査とは？■

私に言わせれば、人間（人類）の歴史は「戦争（と平和）の歴史」だが、「戦争」が起きるためには、人間（人類）の存在だけでなく、国家（国民）の存在が不可欠だ。したがって、戦争の始まりは、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明等々が生まれた時期ではなく、エジプト王国やギリシャ、アテネ等の都市国家、インドではムガル帝国等々、そして中国では春秋戦国時代以前の夏・殷・周等の国家が生まれた時期になるはずだ。

他方、「犯罪」は国家が生まれる以前の人間（人類）社会の中にも存在していたはずだが、「犯罪」を処罰するシステムたる「罪と罰」がいつどのような形で成立したのか、また、犯罪を捜査し、処罰を実行するための強力な（国家）権力がいつ、どのような形で成立したのかを私は知らない。しかし、当然それは国家の誕生とともに生まれてきたものだ。

ちなみに、私は中学生時代に観た『十戒』（56年）からさまざまなものを学んだが、同作で見た「モーゼの十戒」は、私が1971年1/26の21歳の誕生日から司法試験の刑法の始めた勉強で学んだ「罪刑法定主義」の最初のもの・・・？すなわち「十戒」では、盗むなかれ、殺すなかれ、犯すなかれ、等10項目の犯罪が法定されていた（だけだった）が、要するに、あの時代の犯罪はそれで十分だったわけだ。他方、犯罪の捜査について、私は司法試験合格後の刑事訴訟法の勉強で学んだが、「モーゼ」は訴訟法をどこでどのように定めたの？

他方、数多く鑑賞しているTV時代劇ドラマの「始皇帝モノ」から私は、秦の始皇帝の時代（BC221~210年）における、商鞅を中心に確立された「法治主義」を興味深く学んでいる。そこでの犯罪はメチャ多い上、「罪と罰」の定めもメチャ多い。ちなみに、近代国家では「極刑」は死刑だけだが、始皇帝の時代の「極刑」は「族刑」（クーデター未遂など王権を脅かす重罪を犯した者は、罪人自身のみならず、その一族も根絶やしにする刑罰）、「車裂（くるまざき）の刑」（首、両手、両足の五つの部分を紐で縛り、紐の先を5頭の馬車に

つなぎ、馬を駆り立てることにより死刑囚の体を5つに裂く刑罰)、「坑」(生きたまま縛り穴に埋める刑罰)等があった他、「墨」(ぼく)や「黥」(けい)(額・頬など顔面に入墨する刑罰)、「鼻」(鼻を削ぐ刑罰)等の「肉刑」もあったから、すごい。

しかして、「ベルギーの闇の3部作」で有名なファブリス・ドゥ・ヴェルツ監督が本作で描く、1995年にベルギーで起きたマルク・デュトルー事件(ベルギーとフランスの社会を震撼させた連続少女拉致・監禁・強姦・殺人事件)とは?その犯罪捜査に当たったのはベルギーの犯罪捜査機関たる憲兵隊、自治体警察、司法警察の三者だったらしいが、それって一体ナニ?日本の弁護士で日本の刑事訴訟法を学んだ私は、犯罪捜査に当たるのは「警察と検察(のみ)」だと理解しているが、1995年のベルギーは全然違っていらしい。なるほど、なるほど・・・。

■主人公は憲兵隊の下っ端!職務熱心だが、こりゃ大問題■

本作の冒頭、「1995年、ベルギー。警察組織の改革・統合が議論される中、憲兵隊と自治体警察と私法警察は敵対。この3組織の連携は途絶えた状態にあった。」との字幕が流れるから、それに注目!続いてスクリーン上は、憲兵隊下っ端の若者ポール(アントニー・バジョン)が同僚と共に問題を起こした疑いのある未成年の自宅を訪問した際に、突発的に保護者を殴りつけ乱闘となってしまうシークエンスになる。近代国家の犯罪捜査ではこんな無茶が許されないのは当然だから、そこに見るポールの行動は大問題だ。「デュープロセス」はアメリカの価値観だが、1995年当時のベルギーでもそれは近代刑法、近代刑訴法を貫く概念になっていたはずだ。

もっとも、本作は本筋とは関係のない(?)ポールの私生活における、シチリア系の恋人であるジーナ(アルバ・ガイア・クラゲード・ペルージ)との幸せな恋愛展開から結婚に至るプロセスが詳しく描かれるから、アレレ、アレレ。ポールは憲兵隊と自治体警察と司法警察との対立というパブリックな問題よりも、ジーナとの幸せな家庭の構築というプライベートな価値を優先してしまったの?そう思っていると、スクリーン上は一転して、7歳の少女セシルと8歳の少女エリナが行方不明になって3ヶ月が経過。司法警察は事件性がないと見て捜査に尽力せず、有志の人々による操作と報道だけが続いている状況が映し出されるので、それに注目!

■凶悪犯の手掛かりは?マルドロール作戦とは?■

スクリーン上に流れるマスコミからの事件に関する報道は、「手がかりなし!」ばかりだから、憲兵隊下っ端のポールとその同僚のルイス・カタノ(アレクシス・マネンティ)はもとより、ポールの上司で准尉のシャルル・ヒンケル(ローラン・リュカ)のイライラは募るばかりだ。そんな状況下のある日、ポールの元にマルセル・ドゥデュー(セルジ・ロペス)という男の情報提供が。それは、ドゥデューは表向きはくず鉄業者だが、豚肉加工品の闇取引に文書偽造などの悪事を働いており、少女が失踪する以前に「誘拐すれば1人15万フラン稼げるぞ」と灰めかしたことがあったことや、2~3年前から地下室を工事し続

けているとの情報だったから、かなりの有力情報だ。

そんな中、ヒンケルはポールとカタノに対し、ドゥデューには未成年へのレイプ歴があり、犯人である可能性を告げると共に、マルク・デュトルー事件捜査のための「マルドロール作戦」を告げたから、2人は即座に参加を表明！さあ、「マルドロール作戦」の展開は如何に？

本作中盤は、新婚間もないジーナとの家庭生活を顧みることなく捜査に没頭するポールの姿に注目！ポールのまさに労働基準法を無視した（？）獅子奮迅の働きの結果、ポールはドゥデューと、自動車会社エデルワイスの経営者であるジャッキー・ドルマン（ジャッキー・ペロワイエ）やドゥデューの元で麻薬密売をするディディエ・ルナール（ダヴィッド・ミュルジア）の存在をつかみ、少女を誘拐しようとした白のメルセデスがナンバープレートを毎回変えていたことをヒンケルに報告。これによって捜査は大きな進展を見せたため、ポールはますます意気込んだが、逆にヒンケルは自身の立場を考え神経を尖らせることに・・・。

なるほど、なるほど、憲兵隊と自治体警察と司法警察の3つの組織の対立も腐っているが、憲兵隊の「マルドロール作戦」遂行をめぐる方針もハチャメチャだから、憲兵隊内部もまさに腐敗！その結果、必然的に惹起されていくマルク・デュトルー事件の犯人と目されるドゥデューたちの暴走とポールの暴走は、あなた自身の目でしっかりと。

■□■ポールの出自は？夫婦間に亀裂が！ポールの選択は？■□■

本作は、タイトルどおり「マルドロール作戦」を見せることによって、マルク・デュトルー事件の捜査を巡る、ベルギーの憲兵隊と自治体警察と司法警察という3つの犯罪捜査機関の腐敗ぶりを暴く問題提起作だ。しかし、同作が155分という長尺になったのは、それを見せるだけにとどまらず、前半のジーナとの結婚にみる主人公ポールの幸せな姿と、後半にみる捜査に暴走した結果、あつと驚く結末に至ってしまうポールの暴走ぶりを描いたためだ。

本作前半にみるポールとジーナとの恋物語の展開はおとぎ話のような素晴らしさだが、ある日、ポールの生みの母親だというリタ（ベアトリス・ダル）がジーナとその家族の前に登場してくると・・・？父親は服役中であり、法的な親を持たず孤児として生きてきたポールは、ジーナにも両親の存在を秘密にしていたから、反発するジーナに対してポールは「家族はいない。君しかいないんだ」と詫びたが、母親が娼婦だと知ったジーナのショックは・・・？それによって夫婦関係に亀裂が生じたのは仕方ないが、プライベートでのそんな危機の中、ポールが「マルドロール作戦」の展開に向けて選んだ、ある決断とは・・・？

■□■実録犯罪映画の傑作2作と本作を対比！■□■

本作のパンフレットには、高橋諭治氏（映画ライター）のREVIEW「実録犯罪映画の迫真性とパラノイアの混沌が渦巻くナイーブな“正義”VS. 腐り切った“悪”の闘い」がある。そこでは、ファブリス・ドゥ・ヴェルツ監督が、「1990年代のベルギー社会を震撼さ

せたマルク・デュトルー事件に材を得たこの企画に取り組むにあたり、参照した過去の作品のリストを率直に挙げている。とりわけ、ポン・ジュノ『殺人の追憶』(03年)、『シネマ4』240頁)、デヴィッド・フィンチャー『ゾディアック』(07年)、『シネマ15』283頁)、クエンティン・タランティノー『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』(19年)、『シネマ45』137頁)に強い影響を受けたという。」と解説した上、「なかでも『殺人の追憶』『ゾディアック』は比較対象として実に興味深い」との結論を導いている。その他、このREVIEWは本作と『殺人の追憶』『ゾディアック』を対比する中で、素晴らしい論点整理をしているので、これは必読！

■西欧の近代民主主義国家の犯罪捜査がここまで腐敗！？■

2024年12/4の韓国における戒厳令の宣言、そして2025年6/3の大統領選挙で野党革新候補の李在明氏が与党保守系候補の尹錫悦氏に勝利した後に実施中の「検察改革」、さらに韓国における歴代大統領の退任後の逮捕劇を見てみると、韓国の刑法や刑事訴訟法そして犯罪捜査はまだ未成熟！私はこのように韓国の犯罪捜査や検察制度が“未熟”なのは、韓国が民主主義国になったのが朝鮮戦争(1950年～1953年)以降だという“後発性”のせいだと考えていた。

しかし、西欧の近代民主主義国家たるベルギーの1995年における犯罪捜査が憲兵隊、自治体警察、司法警察の3つに分かれ機能不全に陥っていたことにビックリ！その実態は155分の長尺となった本作をじっくり鑑賞すれば明らかだが、それをより深く勉強するためにはパンフレットにある末道康之氏(南山大学大学院法務研究科教授)のCOMMENTARY「デュトルー事件に着想を得た映画『マルドロール／腐敗』」を熟読する必要がある。

近時、大ヒットしているキアヌ・リーブス主演の『ジョン・ウィック』(14年)、『シネマ37』77頁)とそのシリーズは単純な「復讐モノ」で、主人公の素晴らしいプロの腕前だけで十分に魅せる映画だ。それに対して本作は、未熟だがとにかく職務熱心な憲兵隊の下っ端青年ポールを主人公にしているだけに、巨悪に直面した際にポールが取った行動は実に意外なものになる。そして、それは日本人なら誰でも「いくら職務熱心でもそこまでやるか？」と思わざるを得ないものだ。

『殺人の追憶』は素晴らしい刑事魂を持った主人公の粘り強い捜査の結果、見事に(無事に)解決(＝イコール犯人の検挙)に至ったが、さて本作は？ベルギーで1995年に起きたマルク・デュトルー事件は公式には解決済みとされているそうだが、本当に解決しているの？本作鑑賞後、そんな(余計な)ことも考えながらファブリス・ドゥ・ヴェルツ監督が本作に込めた問題提起をしっかり受け止めたい。

2025(令和7)年12月10日記